

「大黒屋光太夫とラクスマン」について(2)

天明2年（1782）月、伊勢国白子の船頭・大黒屋光太夫ら16名が乗り込みを積み江戸へ向かう途中、駿河沖で暴風にあい、8ヶ月間漂流して、翌年の7月、アリコーシャン列島のアムチトカ島に漂着し、その10年後にロシアの好意で3人が日本に送還されました。このロシアの真意は、日本との交易開始であり、遣日本節ラクスマンらの重大な使命でもありました。

松前藩主宛ての書簡

寛政4年（1792）9月、工カテリーナ号は、ラクスマンらロシア人約40人と光太夫ら日本人漂流民3人を乗せて根室に投錨し、ラクスマンらは光太夫と共に上陸し、運上屋を訪問しました。対応した根室勤番の松前藩士・熊谷畠太郎に、来航の理由と、季節が遅くなつたので、湾内で越冬しな

月間漂流して、翌年の7月、アリコーシャン列島のアムチトカ島に漂着し、その10年後にロシアの好意で3人が日本に送還されました。このロシアの真意は、日本との交易開始であり、遣日本節ラクスマンらの重大な使命でもありました。

たい旨を述べました。また、熊谷の請求により、ラクスマンらは松前藩に提出すべき「松前藩主宛書簡」を作り、訳文を添えて提出しました。

藩主宛ての書簡の内容は、ロシアに漂流してきた日本人3人を、女帝陛下からの命により、日本の中央政府（江戸幕府）に引き渡すため渡来した事を、中央政府に伝えてほしい事と、そのための航海について、安全を保障して欲しいというものでした。

藩吏は、直ちにこの報告書と共に、ロシア人と会話記録や、「光太夫口書」を添付して、松前・福山に報じました。松前藩もこれに驚き、直ちに江戸幕府に報じるため、藩士1人を江戸藩邸へ派遣、また、根室にも、藩士・近藤吉左衛門ら4人を遣わしました。

幕府の対応

寛政5年（1793）3月2日に福山に到着しました。また、11月6日付けで幕府は、松前藩に、ロシア人については、江戸から命令

が根室に来たとの知らせが、寛政4年10月には江戸に届き、老中・松平定信はその対応策について、老中・若年寄・三奉行に諮りました。諮問内容は、「国防」「漂流民の受取」「通商」の問題でした。

同年11月8日付けで、定

のあるまで決して出航させず、手荒にせず、失礼の無いよう丁寧に対応せよ、といた指令を出しました。11月11日、家督相続で将軍・徳川家斉に謁した松前章廣は、若狭守の称を与えられると同時に帰藩を命ぜられ、章廣は12月中旬には松前に到着しました。また、幕府から、この件についての手当として、米千俵が松前藩に下賜されました。

「出迎え隊」と、ラクスマンらとの交渉はほぼ1ヶ月に及び、陸路を主張するシア船の打ち払いと長崎回航を斥け、国防問題を第一とし、ロシア側からどうしても江戸湾直行を望んだ場合に、初めて長崎回航を持ちだす、という方針が記されておりました。そして、この度については、ロシア使節が日本人漂流民を送り届けたことであるので、鎖国下の国法を諭すにどめる、という事にしました。

南部・津軽藩の出兵

幕府は、松前藩に指令を出した同じ日に、南部・津軽藩にも警戒のため蝦夷地への出兵を命じました。

南部藩の軍勢380余人は、寛政5年4月1日に松前に到着し、正行寺を本陣としました。また、津軽藩の軍勢200余人は、同年4月12日に松前に到着し、専念寺に入り、警戒に当りました。

箱館入港

結局、松前藩船の禎祥丸と工カテリーナ号は、砂原に向けて両船同時に出港し、そこから陸路で福山に上ることになり、5月7日に両船は根室を出航しました。

が、動けず、6月3日に厚岸を出航しましたが、濃霧で両船は離れてしまい、禎祥丸は砂原に着きましたが、

寛政5年4月1日、ロシア使節「出迎え隊」の松前藩士・医師・料理人ら60人

工カテリーナ号の姿は見えず、6月8日になつて箱館

ロシア使節との交渉

と、随行のアイヌ150人が根室に到着しました。

すぐに、松前行きの交渉が行われますが、小市は「出迎え隊」が到着した翌日の4月2日に死亡してしまいました。

「出迎え隊」と、ラクスマンらとの交渉はほぼ1ヶ月に及び、陸路を主張する「宣説使」石川忠房・村上義礼に与えた「ロシア人取扱方訓令書」によれば、ロシア船の打ち払いと長崎回航を斥け、国防問題を第一とし、ロシア側からどうしても江戸湾直行を望んだ場合に、初めて長崎回航を持ちだす、という方針が記されておりました。そして、この度については、ロシア使節が日本人漂流民を送り届けたことであるので、鎖国下の国法を諭すにどめる、という事にしました。

が、動けず、6月3日に厚岸を出航しましたが、濃霧で両船は離れてしまい、禎祥丸は砂原に着きましたが、